

「カメラはレントゲンの眼を持っています。カメラは魂を覗き込んでしまうんです。カメラの前じゃ正体を隠せないんです。そこが映画のすごいところだと思いますね。」(ダグラス・サーク)

「濱口竜介 即興演技ワークショップ in Kobe」は「カメラの前で演じることをテーマに、2013年9月より5ヶ月間のワークを重ねてきた。ワークショップ終了後、有志による長編映画制作に入る。ただ、いわゆる演技のレッスンはほとんど行っていない。参加者がしてきたのは、基本的にはただひたすら他人に、そして自分に「聞く」ということだ。

聞くことが何故「カメラの前に立つ」とことつながっていると言えるのか。「本当に何かを聞く」ことは、率直に反応する身体を持つことに他ならない。一方、カメラは常に、レンズの先に立つ者に「お前は誰だ」という問いを突きつける。カメラの前で、自分が何者か隠すことはできない。だとすれば「聞く」ことは、カメラの前に、率直な自分として立つことを何より助けるだろう。

ワークショップ終了に際して行なわれる今回の成果発表では、映画撮影前の最終段階として、長編映画用シナリオ『BRIDES(仮)』の「本読み」及び「キャラクター・インタビュー」の映像を公開する。そのことにより、今後制作する映画を「テキスト」と「演者」の二つの側面から予告する。当日お越しいただく観客の皆さんには、この「書き言葉」と「話し言葉」を往復することで、未来の映画を見出して欲しい。(濱口竜介)

## 『BRIDES(仮)』 公開本読み

ワークショップ参加者全員で、シナリオ『BRIDES(仮)』の本読みを全編通して行なう。シナリオはワークショップ参加者によるブラッシュアップを経て完成したもので、今後制作される映画を「テキスト」の側面から予告する。  
台詞・ト書きの読み上げは、テキストに内在する「声」を聞き取るようにして、行なわれる。

日時: 2014年2月15日(土)

①13:00 ~ 15:30 \*

②18:00 ~ 20:30

※★の回はアフタートークあり。

濱口竜介 × 芹沢高志 (デザイン・クリエイティブセンター神戸 センター長)

※途中休憩あり / 2回とも同内容 / 終了時間は変更の可能性があります。

場所: デザイン・クリエイティブセンター神戸 3F 301

参加無料 / 要申し込み / 各回定員40名

●申し込み: ウェブサイト (<http://kiito.jp/>) からお申し込みください。

\*申し込みは1月31日(金)11:00から開始します。

KIITO アーティスト・イン・レジデンス 2013

# 濱口 竜介

即興演技ワークショップ in Kobe

成果発表: 自分が誰なのか言ってごらん?



## キャラクター・インタビュー 映像展示

ワークショップのカリキュラムにおいて、参加者一人ひとりが自分の役柄を演じながら、互いに聞き合い、即興的に答え合うインタビューを行った際の記録映像を公開する。今後制作する映画を「演者」の側面から予告する。より「話し言葉」に近い、演者たちの姿を映し出すものになる。

日時: 2014年2月15日(土)

11:00~20:30

場所: デザイン・クリエイティブセンター神戸 3F 303

入場無料 / 申し込み不要 / 入退出自由

主催: デザイン・クリエイティブセンター神戸



## KIITO: DESIGN AND CREATIVE CENTER KOBE

デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO)

〒651-0082 神戸市中央区小野浜町1-4  
TEL: 078-325-2235 FAX: 078-325-2230  
E-MAIL: [info@kiito.jp](mailto:info@kiito.jp) WEB: <http://kiito.jp/>

JR、阪急、阪神線三宮駅より南へ徒歩20分  
神戸市営地下鉄海岸線三宮・花時計前駅より徒歩10分  
ポートライナー貿易センター駅より徒歩10分  
※駐車場はございませんので、公共交通機関をご利用ください。



### 濱口 竜介

映画監督

1978年、神奈川県生。2008年、東京藝術大学大学院映像研究科の修了製作『PASSION』が国内外の映画祭で高い評価を得る。その後も日韓共同製作『THE DEPTHS』(2010)、東日本大震災の被災者へのインタビューから成る映画『なみのおと』『なみのこえ』、東北地方の民話の記録『うたうひと』(2011~2013 / 共同監督: 酒井耕)、4時間を越える長編『観密さ』(2012)を監督。精力的に新作を発表し続けている。

# カメラ

KIITO アーティスト・イン・レジデンス 2013

# 濱口 竜介

即興演技ワークショップ in Kobe

成果発表: 自分が誰なのか言ってごらん?

KIITO:

# 誰なのか

2014. 2. 15 Sat.

11:00 ~ 20:30



# 言葉

カメラは魂を覗き込んでしまうんです。  
カメラの前じゃ正体を隠せないんです。  
——ダグラス・サーク

『BRIDES(仮)』公開本読み



キャラクター・インタビュー映像展示

# いらすと?

KIITOアーティスト・イン・レジデンス2013  
濱口竜介 即興演技ワークショップ in Kobe  
活動記録

アーティストがKIITOを拠点として、神戸のまちや周囲の人々と交流を重ねながら滞在制作を行う「KIITOアーティスト・イン・レジデンス」のプログラムとして「濱口竜介 即興演技ワークショップ in Kobe」を9/14(土)より開始した。カリキュラムは基本的に毎週土曜日行われ、「聞く」を大きな柱として様々なワークを積み上げてきた。今回成果発表を行なうにあたり、ワークの全貌を紹介する。(テキスト：濱口竜介)

## 第1回 9.14 土

オリエンテーション  
自己紹介その1 / 「声」についての講義

自己紹介を兼ねた簡単なインタビューゲームを行なう。円になって、時計回りに聞き手・語り手を担当しながら、インタビューをして行く。ルールは答える際に「一つだけ嘘」を交えること。全参加者が揃っていないこともあり、半数だけ自己紹介を済ませた。その後、ワークショップ全体が目指す方向性として、濱口が「声」についての講義を行なった。酒井耕と共同監督した東日本大震災被災者へのインタビュー映画『なみのこえ』制作時の体験を踏まえた講義。以下、講義原稿からの抜粋。

「不思議だったのは酒井と二人でインタビュー撮影の振り返りをすると、『良い』と思える瞬間が一致していたことです。何が良かったのか。とてもクリアな、混じり気のない声をしている、という気がする。その声はいったいどこからやって来るのか、どのようにして現れるのかを二人して考えるようになりました。

人が他人に話せる話題はレイヤーが分けられています。社交辞令から成るような一番浅いレイヤーから始まり、深層に行けば行くほど話せる人を選ぶ話題、つまり秘密に近くなります。最深層には、誰とも分け合うことのできない、ほとんどその人自身であるような「秘密」が存在するように思います。『なみのこえ』のインタビューをしていて、時折聞くことがあったような気がした声というのは、何だかこの辺りから発されているような気がします。実際に話題にされていること、言葉にされていることは他愛ないことだけど、その人自身の声であることを疑わせないような、とてもクリアな濁りのない声が、現れることがある。

こういう声が何で出てくるんだらうかと酒井と話したときに、非常に当たり前のことを確認しました。それは、僕たちが『聞いている』からこの声は現れて来るんだ、ということです。僕たちがどんな人間であるか、ということはそれほど関係なく、「聞かれている」話してもいいんだ」という実感を向こうが持てたときに、こうした声はスッと現れてくるんだという感覚を持ちました」



## 第2回 9.21 土

自己紹介その2 / 第1回ダイアログ・カフェ  
オリエンテーションの続きとして、残り半数の自己紹介から始める。趣向を変えて、それぞれ自分の子ども時代の写真を持参し、スクリーンに投影。写真を見た参加者のインタビューを受けながら、それぞれの来歴を語る。誰しもが、

今はまったく姿形の違う「子ども」であったというごく当たり前の事実を確認する。

ワークショップカリキュラムの一環として行われる公開インタビュー「ダイアログ・カフェ」の第1回を行った。ゲストはみやぎ民話の会・顧問を務める小野和子さん。この日同時上映を行った、東北の民話語りを記録した映画『うたうひと』にも出演しており、上映後のトークは濱口がメインの聞き手となって進行了。40年以上、民話の聞き手として語り手と向かい合って来た小野さんに「聞くこと」とは何かを問う。参加者の質問にも答えながら、「聞くこと」はそれまでの自分を捨て去ることだと小野さんは語る。



## 第3回 9.29 日

砂連尾理さんによる身体表現講座 #1 /  
ダイアログ・カフェ打ち合わせ

ダンサー／振付家である砂連尾理さんをゲスト講師に招いての「身体表現講座」第1回(全5回予定)。身体表現の経験がない受講生も多いの中で、「身体で」「聞く」ことを探究して行く。長めのストレッチで体をほぐした後に、互いのパーソナル・スペースに踏み込むワークを行う。耳と耳、まつげとまつげなど自分の身体の一部を触れ合わせ、「他人」同士ではなかなか成立しない距離に入って行く。会話を重ねることはまた異なる、身体を通じての率直なコミュニケーションを目指す。

その後、参加者が主体となって行う今後の「ダイアログ・カフェ」に関して、3つの班に分かれて話し合いを行う。どんな人呼びたいか、どんな話を聞きたいか。各班で1組ずつゲストを呼ぶことが決まる。

## 第4回 10.5 土 — 11 金

フィールドワーク「いい声を撮りに行く」

各自が、「自分が興味のある人」のところへ赴いて、その人にインタビューを行なう。しかし課題は、インタビュー内容のものにはなく「いい声」を撮ること。東は横須賀から西は姫路まで、インタビュワーに加えて、それ以外の有志が「観客」として、ワークショップのスタッフが撮影担当として同行した。インタビューは毎回約2時間に及び、その都度、インタビュー内容を振り返るフィードバックも現地で行なった。この時間帯に「いい声」が出ていた、という認識はその場にいたもの全員、不思議なほど一致していた。

## 第5回 10.19 土

「いい声」プレゼンテーション

前回のフィールドワークで撮って来たインタビュー映像の中から約5分程度「いい声」を話していると思われる時間を各自抜粋し、上映をしてそのときのシチュエーションを語る。「なぜいい声と思ったか」「どのようにしてその声を発するに至ったか」がプレゼンテーションさ

れた。響きに「ウツなく」「本当のことを言っていると感じられる瞬間が『いい声』として選び取られる傾向があった。声に、極めて率直に心情が反映されることに一同、驚かされる。



## 第6回 10.26 土

砂連尾理さんによる身体表現講座 #2

身体表現のゲスト講師として砂連尾理さんを迎えた第2回。「距離と越境」をテーマとして、互いの関節を曲げ合って「痛み」の発生するギリギリを見極めるワーク、見つめ合いながら互いにとって適正な「距離」を見つけるワークを行なう。仕上げとしてピナ・バウソン作品『コンタクトホーフ』の中から「多数の男性が女性を触る、つかむ、持ち上げる」一場面を模倣した。同性や性別逆転のパターンでも再現し、日常のコミュニケーションでは起こらないような身体の接触へと踏み込んで行く。



## 第7回 11.2 土

「偶然写真」プレゼンテーション

11月のテーマは「偶然」。この週の課題は、「偶然／もしくはその痕跡を写真に撮って来る」こと。自分の生活に訪れた偶然の瞬間を写真に取めること。偶然が起きたその痕跡の写真でも構わない。それぞれが、写真をスクリーンに投影し、その週に自分が出会った「偶然」についてプレゼンテーションする。それぞれの「偶然」観が語られ、偶然の定義が激しく揺れる。あらゆるものが偶然に見えて来る。また、偶然の写真はこの月を通じての課題となる。毎日撮影し、11/30(土)の身体表現講座の際にそれらを連れて、各自の「偶然のダンス」を発表する。



## 第8回 11.9 土

インタビューゲーム「3つの偶然」

3週に渡る「短編映画撮影プロジェクト」の第1週。ワークショップ参加者を男女2人ずつの5班に分ける(人数合わせのためにスタッフも参加)。班の中で、男女がペアを作り「今の自分を形成した3つの偶然」についてインタビューし合う。3つの偶然のうち1つは、自分が生まれ

る前に起きた偶然でなくてはならず、参加者は必然的に自分自身のルーツを調べて、約2時間のゲームに臨むことになる。このインタビューの様子は撮影記録され、カメラ・ポジションは濱口の監督した「東北記録映画三部作」を踏襲した。各ペアは、それぞれに向けられたカメラを真正面に見据えながら話し合う(Z形式と呼ばれる：写真参照)。撮影者は各班のもう一方のペアを担当した。男は男を、女は女を撮る。後日、撮影者は被撮影者を演じるようになるため、この日撮影された映像素材は、演者の資料として配布された。



## 第9回 11.16 土

演技のための取材「デート」

参加者はこの週週の「短編映画撮影」において、インタビューゲームで自分が撮影した相手(男は男、女は女)を即興的に演じる。そのために、各自が演じる対象を取材する時間となった。前週のフィードバックも兼ねて、「3つの偶然」以外の来歴をお互いにインタビューし合う。聞くのは自分たちの聞き易い場構わず、KIITOを出て喫茶店や水族館、ショッピングなどでの、さながら「デート」とよく似た取材となった。取材終了後は、翌週のための演技リハーサル及び、フィードバックを行なった。単なる物真似で終わらない演技を目指す。



## 第10回 11.23 土

短編映画撮影  
書き起こし／本読み

11/9(土)にインタビューし合った各ペアが、今度はまったくの他人(各班の同性キャラクター)を演じながら、「3つの偶然」を90分に渡ってインタビューし直す。自分と同じ年代を演じるとは限らず、中には20代で60代を演じる人も。自分たちが撮影したペアの完全コピーを図るペアや、まったく逸脱して即興的に演じるペアなど、それぞれの特色が出た。ワークショップの大半を占める演技未経験者にとっては初めて「演じる」機会ともなった。このときの撮影はスタッフを担当し、カメラ・ポジションは前回同様「東北記録映画三部作」を踏襲した。



## 第12回 11.30 土

第2回ダイアログ・カフェ /  
砂連尾理さんによる身体表現講座 #3

午前中は翻訳家の柴田元幸さんを迎えての第2回ダイアログ・カフェ「翻訳の聞く(イン)・演じる(アウト)」。柴田さん自身が翻訳されたブライアン・エヴンソンの短編朗読から始まり、「翻訳する身体」について何う(聞き手はスタッフの脚本家・高橋知由)。柴田さんが語る原文と訳文の関係―「テキストの声を聞き取る」ことに、演技におけるキャラクターと演者のアナロジーを見る。

午後は、砂連尾理さんを講師に迎えての身体表現講座第3回。「呼吸を合わせる」ことをテーマにワークを行なう。ペアを作り、相手を見つめながらの視覚的な模倣に始まり、逸脱して行く。単に視覚的にはなく「呼吸を相手に合わせる」とはどういうことかを探る。ラストは各自、この月に自分が出会った偶然をテーマにした「偶然のダンス」を発表し、11月を締めくくった。12月のテーマは「書き言葉」であると発表される。



## 第13回 12.7 土

短編映画撮影フィードバック  
書き起こし／本読み

11月の「短編映画撮影」のフィードバックを班毎に行なう。各班の男女ペアがもう一方のペアの記録映像(自分たちを演じた映像)を確認し、「何がなぜ起きているのか」インタビューしたい箇所の会話を書き起こした上で、聞き合う。「事前の取材でここまで聞けたかが、演じる際の自由さにも反映された」「演じる対象がいることが、やり易くもあり、やりづらくもあった」など意見が出る。最大限演じる対象を尊重しつつ、自由に演じることの必要性和難しさに突き当たる。最終的には各ペアの映像素材から、「何かが、ほんとうに起きている」と感じられる5分程度の抜粋箇所を選定。短編映画はこの抜粋の集成から作られる予定。

後半は、書き起こし原稿の中から、最終的に選ばれた箇所を2人1組で「本読み」をする。本読みの方法は「1、電話帳を読むように感情なく、抑揚なく読む。2、読点は一粕、句点は二拍空ける。3、句点毎に読み手を交替する。4、感情がもし入って来たら、拒まない。」無感情／無抑揚な読み上げにより、却って言葉の存在感が浮かび上

がる。スタッフの高橋は「こんなに研ぎすまされた言葉は書こうと思って書けない」と驚く。



## 第14回 12.14 土

ラブレターを書く／読む

参加者が「ラブレターを書きたい人」に手紙を書く。具体的な宛先があること、投函を念頭に置くことだけを条件に、「ラブ」の定義は任される。参加者はKIITOを出て喫茶店など各自が書き易い場所を手紙を書く。

後半はそのラブレターをテキストに本読みをする。使用する手紙は原本ではなく、宛先などの固有名詞が黒塗りされたコピー。差出人不明の手紙をくじのように選び、2人1組で読み上げる。本読みのルールは前回と同じだが、更に「1、先に読む人がリーダー。2、フォロワーはリーダーのスピードに従う。3、できる限りゆっくり読む。4、まるで1人が読んでいるような状態を目指す」という注意事項が加わる。フィードバックで、ラブレターを書く行為について「自分にヤスリをかけていく作業だった」という感想が出る。決して日常には現れ出ない感情の(無感情な)表出に、静かな驚きを覚える。



## 第15回 12.21 土

第3回ダイアログ・カフェ

ブックディレクターの幅孝孝さんを迎えての第3回ダイアログ・カフェ「本と『聞く』こと、本当の出会い」。ワークショップ参加者が企画した初めてのダイアログ・カフェでメインの聞き手も参加者が務めた。場に合わせた本棚を作るために選書をする幅さんのお仕事を伺う。情報が溢れた社会の中で、改めて「本」というモノに接することの身体的な楽しさが語られる。参加者各人が「好きな本」を90秒でプレゼンする機会も設けられ、一冊一冊の本自体が、人とひとの行き交う結節点であることが明らかに becoming 行く。



## 第16回 12.22 日

砂連尾理さんによる身体表現講座 #4

前回の「呼吸を合わせる」を発展させて、砂連尾理さんが普段からやっているような「距離の即興」を行なう。2人ペアとなり呼吸しながらお互いが「ヒリヒリできる」距離を模索する。ワーク自体は3人1組となって、各ペアの3分の即興をもう1人が観察し、その都度フィードバックを行なう。その「観察者」を更に外側からカメラで撮影することによって、集中状態の渦巻がその場に現れる。前回の講座で課題として出されていたロベール・ブレッソン監督「ラルジャン」の抜粋(1分程度、2箇所)の動作・台詞を再現する。映像を完全再現することの不可能さと、脚本のト書きをそのまま動作化したようなブレッソンの「書き言葉」的身体が浮かび上がる。



## 第17回 1.11 土

脚本選定

年末年始に「はたのこうぼう」\*が書き上げた3つのシナリオ『めまい』『チャンス』『VOICE』の中から、参加者のディスカッションを経て、ワークショップ終了後に撮影する映画のシナリオを選定する。

シナリオはそれぞれ、ワークショップのこれまでの経緯を踏まえて書かれたもので、「社会システムの中で、自身に率直であること」をテーマとする3本の中から、選定作業を行った。結果的に『めまい』『チャンス』の2本に絞り、次週以降の選定となった。

\*映画監督の濱口竜介、野原位、脚本家の高橋知由が神戸で結成した脚本ユニット。



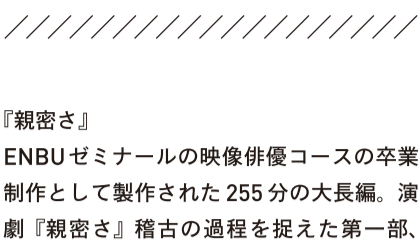
## 第18回 1.18 土

第4回ダイアログ・カフェ / ディスカッション

「音遊びの会」を迎え、知的障がい者と健常者のミュージシャンやダンサー、保護者との即興的な音のコラボレーションが展開される。聞き合い、呼吸する中で、ある音を発することが、その前の音を肯定していく。演奏の最後は、来場者ほぼすべてが参加するビッグバンドによる即興演奏が行なわれた。誰もが「個」でありつつ、即応し、一つの場を作り上げる「音遊びの会」の姿が、このワークショップの目指す姿とも重なる。その後、成果発表に向けて、再度のディスカッション。「めまい」を改稿した『BRIDES(花嫁たち)』を映画制作のためのシナリオとしてスタッフが提示する。成果発表として、『BRIDES』の「公開本読み」と「キャラクターへのインタビュー」が決定される。

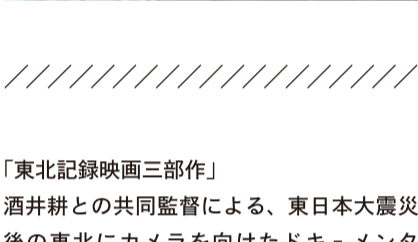


ワークショップと関連した濱口竜介作品

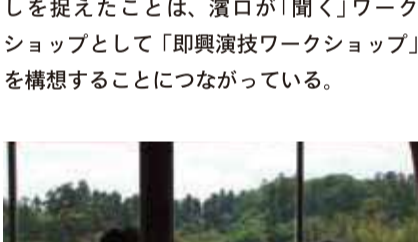


『親密さ』

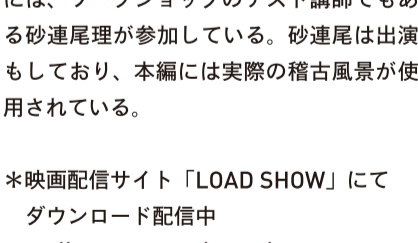
ENBUゼミナールの映像俳優コースの卒業制作として製作された255分の大長編。 演劇「親密さ」稽古の過程を捉えた第一部、公演全体を記録した第二部、エピソードの第三部から成る三部構成。膨大な量の言葉、カメラを真正面から見据える視線、演じて「演じること」自体の記録といったモチーフはこのとき既に現れている。出演する若者たちが撮影過程を通じて果たした飛躍は、濱口に「演じること」が、人間の潜在的な能力や魅力を引き出すことを確信させる。



「東北記録映画三部作」  
酒井耕との共同監督による、東日本大震災後の東北にカメラを向けたドキュメンタリー映画三部作。沿岸部の津波被災者の体験を聞き取る『なみのこえ』『なみのこえ』から成る。特徴的なのは、徹底化された対話の形式と、カメラ真正面を見据える出演者たちの視線である。これを捉えるための特殊なカメラ・ポジションを2人は「Z形式」と名付けた。語りを支える「聞く」者の眼差しを捉えたことは、濱口が「聞く」ワークショップとして「即興演技ワークショップ」を構想することにつながっている。



『不気味なものに肌触れる』  
脚本家に高橋知由を迎えて、それまでの「言葉」偏重の濱口作品から脱却し、身体表現への接近を図った、現時点での最新中編。来るべき長編『FLOODS』の前日譚として位置づけられている。主演の2人、染谷将太と石田法嗣が踊る不思議なダンスの振付には、ワークショップのゲスト講師でもある砂連尾理が参加している。砂連尾は出演しており、本編には実際の稽古風景が使用されている。



\*映画配信サイト「LOAD SHOW」にてダウンロード配信

